天狗　弐

プライア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天狗　弐

【Ｎコード】
Ｎ４２９４Ｊ

【作者名】
プライア

【あらすじ】
以前書いた、「天狗」を別バージョンで長めにしてみました。
鳴浜高校不良女子ボスの目崎文は、霜月高校の諸角とのケンカで自慢の高い鼻を「天狗の鼻」と揶揄され、鼻の集中攻撃を受けてみじめに降参してしまう。その姿を見て幻滅した文の後輩の綾香は、自分が不良女子ボスへと鳴り替わるために文の公開処刑をしようと試みる。

「おらあっ！」
ドゴッ
「あがあっ！」
バタッ
鳴浜高校不良女子ボスの目崎文は県内最強の不良女子だった。今日も明興学院高校の不良女子ボス杉本を倒した。
「さすが文さん！もう文さんは最強ですね！」
「この県の連中は弱すぎ。このまま隣の県の高校をせめて制覇してやろ。」
「文さんなら絶対制覇出来ますよ。」
文はその強さもさることながらビジュアルもトップレベルだった。背も高く、スタイルもよく、目が大きくて、そして文の1番の自慢は・・・
「それにしても文さんの鼻って本当に高いですね。まるで外国人の鼻みたい。」
「何かモデルみたいに高いですよね。文さん顔めちゃめちゃかわいいですけど、鼻の高さが特にきわだっててうらやましいです。」
そう、文は何より鼻が高かった。文にとってこの高い鼻はとても自慢なことであった。
「そう？別に大したことないよ。鼻が高くても低くてもけんかには関係ない。」
「でも高い鼻って折れやすいからけんかでも不利じゃないですか。文さんの高い鼻は強さの象徴ですよ。」
「ははは。まあこの調子で来週は隣の県の霜月高校ってところからつぶしてやろう。」
もはや文は高鼻であるだけでなく、本当に天狗になっていた。
しかし、上には上がいた。

次の週。文たち鳴浜高校の不良は隣の県の霜月高校に攻め込んだ。
このことはすぐに霜月高校の女子ボス諸角の耳に入った。
「隣の県の鳴浜高校が攻めてきただ？」
「しかも、そこの女子ボスの目崎文という女が諸角さんとタイマンをはりたいらしいです。」
「目崎文？へえ～話には聞いたことあるけど、調子に乗っちゃってるね～。ぶっつぶしてやるか。」

「遅いな～びびっておじげついたか？」
文は校舎前で諸角を待っていた。するとそこに手下を連れた諸角が現れた。
「お前か？目崎文ってのは？」
「はん！お前が諸角か！お前をぶっ倒してこの高校をのっとらせてもらう。」
「あん！ん？あ～。」
その時諸角は文の顔を見て何かをひらめいた。諸角の目線の先は文の自慢にしている高鼻だった。
「へえ～田舎者がえらそうなことといいやがって。その天狗の鼻へし折ってしてやるよ。地獄を見せてやる。都会のな！」
「やってみろ！」
文はかまえた。そして諸角もかまえた。
「私が勝ったらお前の高校をいただく。そしてお前には敗北者としてこの学校でさらし者になってもらう。」
「こっちのセリフだ！」
文はなぐりかかっていった。諸角はかわすが、さらに文はパンチを繰り出し諸角のほほにあてた。
ドゴッ
「うおっ！」
「はは！どうだ！」

「さすがに女子ボスを名乗るだけのことはあるな。パンチは強い。だが・・・」
文のパンチをくらいながらも宮村はあるポイントに攻撃を絞っていた。それは・・・
「なんだ！口だけかよ！諸角！全然攻撃当たってないよ！」
「ふん、油断してると痛い目見るぞ！おら！」
ブオッ
「はん！こんな攻撃！」
「ばかが！こっちだ！」
「えっ！」
文が腹への攻撃にガードをかまえたその瞬間、諸角の右ジャブが文の顔面へと向かっていった。そう、諸角の狙いとは・・
バスウウウッ

「あがあああっ！」

文の高い鼻だった。
「文さん！」
「へへへ！その程度かよ目崎文！」
ブオッ
バスバスゥ
「あううっ！！」
ドクドクドク
バスウッ
「うわあああ！！鼻がああああ！！」
文は鼻を手で押さえた。文は自慢の高い鼻に徹底的にパンチを打ち込まれていた。今までこんなにパンチを鼻に入れられたことがないので文はどうすればいいか分からない。強さには自信があった文はまさかここまで一方的にケンカでやられることにはなるとは思っていなかったのである。

「文さんそんな！」
「うそだろ！」
「あうう・・くそっ、おらあ！」
ブオン
ドガッ
「お！くっまだ抵抗できたか。しかしその攻めが命とりになったな。」
ブオッ
「えっ！？」
ミシイイイッ
「はあああああああああああっ！！」
ブシュウウウッ
ストレートはあまりに正確に文の鼻に決まった。鼻血は放射状に噴き出し、気力は一気に失われ、目はうつろになった。致命的なダメージだ。文は鼻の激痛ですっかり体力を奪われてしまい倒れた。
フラッ
バタッ
ドクドクドクドク
「や・・やめてえ・・・」
「文さんが命乞いしてる・・・」
文はすっかり戦意喪失し、命乞いを始めた。手下たちは自分たちが憧れていたボスのこのみじめな姿に幻滅していた。
ドスッ
諸角は仰向けに倒れた文の上に乗った。これで文は動けない。さらに諸角は文の高い鼻を摘みあげた。
グニッ
「はあぁ・・・。」
「はは、天下の目崎文も自慢のこの高いお鼻を集中攻撃されたらダウンかよ。やわな奴め。もう折れるなこの鼻も。すぐに折れないように、１秒でもこの地獄が長く続くようにじわじわお前の鼻を破壊

してやるよ。」
「い、いやだぁ〜〜・・・」
「おらよ！」
グワッ
立ち上がった諸角はすでに動けないほど疲弊している文の体を髪の毛を掴んで持ち上げた。
「ああ！」
「くらえ！」
ガツン
「はうううううっ！！！」
ブシュウウウウ
諸角は頭突きを文の鼻にかました。それも鼻が折れてしまわない程度の強さで正面からガツンとぶつけた。文の鼻から勢いよくまた鼻血が吹き出していく。
「おらよ！」
ガツン
「きゃあああああ！」
ブシュウウウ
ガツン
「ああああ・・・」
ドクドクドク
ガツン
「ああ・・・あ・・・」
ドクドクドク
「ん？」
ジョボジョボジョボ
文は痛さであらゆる感覚がマヒしていき、恐怖のあまりおもらしをしてしまった。黄色の液体が地面に広がっていく。
「文さんが失禁した・・・」
「憧れの文さんが・・・」

「どんどんみじめになっていく・・・」
プ～ン
「くせえな～～目崎。高校生にもなっておもらしかよ情けねえな。」
ガツン
「あううぅ・・・・」
ジョボジョボジョボ
ガツン
「おれる・・・・・」
ガツン
「は・・な・・・・が・・・・・」
ガツン
「はぁぁなぁぁ・・・・」
ガツン
ブシュウウウッ
「がぁぁ・・・・・・・」
「ははは！やっぱ見せかけだったな目崎！お前の本性はそのバカ高いお前の鼻そのものだ！」
「文さんの鼻そのもの・・？」
「お前は見せかけだけの天狗だ！どうだ！見せかけも空っぽの中身も天狗の鼻が完膚無きまでにへし折られた気分は？」
「うう・・・たす・・け・・て・・・え・・・・・・はな・・・お・・ら・・・・・な・・・い・・・・で・・・・ぇ・・・・・・・」
「文さん！」
「じゃあうちの高校の傘下に入るんだな？」
「は・・・い・・・・・」
「え！？」
「ははは！情けない奴め！自分の鼻が折られたくないあまりに自分の高校を差し出すなんてな！おい！目崎の鼻血拭いてやれ！」
「分かりました！」
サワッ

「あああ！！」
「おい！ゆっくりと優しく拭いてやれ。目崎さんご自慢の高い鼻はしっかりとひびだらけになってるだろうからな。ちょっとでも力を入れると折れちまう。」
「そんな・・・あやの・・はな・・が・・・・」
「折らないだけでもありがたいと思え。それとも完全に折ってやろうか。」
「それだけは・・やめ・・て・・・・」
「やめてください、だろ？」
「・・・やめて・・・くださ・・い・・・」
「ははは！みじめな奴！」
「ははははは！」
「文・・さん・・・」
こうして文の鼻血は丁寧に諸角の手下たちに拭かれ、文の鼻は後日整形外科に通うことで何とか鼻は元のように戻った。そして、鳴浜高校は諸角たちの傘下に入ることになった。
しかし、文の手下たちはそのことに納得がいかなかった。

「こないだの文さん、あれ何だよ！鼻が折られるの嫌だからってあっさり負けを認めるなんて。」
「諸角の言う通り文さんは確かに天狗だった。言われてみればうちらの県の高校はそんな強いところはないかもしれない。」
「あんな自分のことしか考えないような奴に私たち今まで付いていってたの？冗談じゃない！」
「じゃあ目崎を倒そう！」
「え！」
文を倒すよう考案したのは、目崎の１つ下の後輩である田代綾香だった。綾香はこれまで文につき従っていた後輩で次期ボスとも噂されていた。
「このままだとうちの高校は諸角の高校の傘下に入ってしまう。私

らで目崎を倒して新体制を作って、諸角にリベンジしよう！」
「でも、目崎を倒すってどうやって？」
「あのあいつご自慢の高い鼻やれば倒せるだろ？それにいい方法があるんだ。」

「文、鼻の調子は大丈夫か？」
放課後、文の鼻の調子を心配して彼氏のヒロキが声をかけてきた。
「大丈夫、もうすっかりひびもふさがったみたい。鼻、折れるかと思った。」
「お前の鼻は高いから狙われやすいし折れやすい。気をつけないとダメだって言ってただろ？」
「うん。文負けちゃった。霜月高校のこと、どうしよう。」
「今、オレら男子陣でも集まって鳴浜と霜月の全面抗争をしようと計画している。県内の他校とも連合を結成してリベンジしようと考えている。」
「！それなら、勝てるかも！」
「ああ！だからもうちょい待ってくれ！その時にお前の屈辱を晴らしてやろう！」
「うん！」
「あの、目崎さん？あっちで2年生の子が呼んでる。」
「あん？誰だ？」

「ん？誰もいない・・」
ガバッ
「目崎先輩、ちょっと眠ってもらいますよ。」
「んんー！！ん・・・」
ガクッ
「これでよし。さあ、公開処刑のはじまりだ。」

「ん～、ここは。。」

文が目覚めるとそこは理科室だった。さらに文は人体模型に縛り付けられて動けない状態だった。
「何これ！動けない！」
「目が覚めましたか、文さん？」
「！！」
文が目を向けるとそこには、綾香や他の不良女子、それに文が今まで苛めてきた普通の高校生たちもいた。
「綾香！これどういうこと！？」
「私たちあれから色々考えましてね。文さんに女子ボスの座はふさわしくないと思って、革命を起こすことにしたんです。そこで文さんを公開処刑することにしました。」
「公開処刑？」
「私たち不良女子と、文さんがこれまで苛めてきた文さんに恨みのある連中たちで一発ずつ文さんを殴らせて頂きます。最終的に文さんの口から私らに実権を与えると認めてもらうまで殴り続けます。」
「はん！私が認めるとでも思ってんの！」
「じゃあ最初のやつから行って！」
すると、そこには文がいつもカツアゲしてきた静川が現れた。静川は早速パンチをかまえた。
「目崎、いつもの恨み晴らさせてもらう！」
「は！あんたなんかが私を・・」
ブオッ
バスウッ
（え・・・？）
「言い忘れてましたけど、私らが殴るのはあなたのその高い鼻です。」
静川のパンチは文の顔面にめり込んだ。文の高い鼻は静川の拳にうずもれている。

パッ
「きゃあああああ！！！」
ドクドクドク
文の鼻から鼻血が漏れ始めた。しかし、まだまだ文の鼻は健在だった。
「不良じゃない普通の高校生はそれほどパンチも強くないからな。だからこそ、すぐに鼻は折れない。だがその分地獄だ。たっぷりと恨みのこもったパンチをそのご自慢の高いお鼻で浴びるがいい！」
「いやだ！やめろ！」
「次の奴！」
「目崎！覚悟！」
「やめろおおおお！」
バスウウウッ
「あがあああああっ！！！！」
「今までの恨み！」
バスウッ
「あぐうううぅぅぅっ！！」
バスウッ
「いやあああああっ！！」
バスウッ
「やめてえええぇぇっ！！」
バスウウッ
「文の鼻がああああっ！！！」
バスウウッ
「だめええっ！！鼻が折れるぅぅっ！！」
バスウウウッ
「きゃあああああっ！おれるうううっ！」
文の鼻に恨みのこもったパンチが次々と叩きこまれていく。文はただひたすら絶叫を上げることしかできない。そして・・
「目崎！お前だけは！」

「いやだあああああ！！」
バスウウウッ
「！！」
ミシミシッ
（・・・うそ・・・文の・・・は・・な・・・が・・・・・）
ピシピシピシッ
（・・・はな・・に・・・・・ひ・・び・・・はい・・・って・・・く・・・・・・あああああ・・・）
ピシイイイイイッ
「はあああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！」

ブシュウウウウウッ
このパンチをうけた瞬間文の顔は一気に憔悴した。そして今まで上げたことのない叫び声を上げると共に鼻血が鼻の両穴からいっぺんに噴出した。それもそのはず。文の鼻骨に一気にヒビが入っていったのだ。
「そろそろお鼻の方は限界みたいだな。じゃあこれからは私たち不良女子がたっぷりとお前の鼻にパンチたたきこんでバキバキにしてやるよ！」
「い・・・や・・・・・・・だ・・・・・」
「あん？」
「ゆるし・・て・・・・・たす・・・け・・・・て・・・・・」
「情けないやつ！こんな奴が私らのボスだったなんて！」
「はな・・・おれ・・・る・・・の・・・・・い・・・・や・・・・・・・」
「どうだ？鼻にまたひびを入れられた気分は？それも自分がいじめてきたやつらに。」
「み・・じ・・・・め・・・・・・」
「そうだろ？だから私らがお前の自慢の高い鼻にパンチをプレゼン

トしてやるんだよ！」
「！！」
「さあ！やってやれえ！」
「おお！」
「や・・め・・てぇ・・・・」
「泣きそうな顔してもおせえんだよ！オラっ！！」
ブオオオッ

バキイイイイイッ

「あぶうううううぅぅぅ・・・・」
ドバアアアッ
とうとう文の鼻は後輩のパンチによって折られてしまった。敵にプライドを捨てて泣き寝入りしてまで守った鼻は無数のパンチを浴びた末に豪快に音を立てて破壊されたのだ。
「ははは！折角この間は折られずに済んだのにね～。とうとう折れちゃいましたね。ご自慢の高い高いお鼻。」
「ぶぅ・・・あ・・や・・・の・・・・・は・・・な・・・・・」
ムクムク
「・・お・・・・・れ・・・・・た・・・・・ぁ・・・・・・・あぅぅぅ・・・・・」
ムクムクムク
「あの高かった鼻が腫れていく。マジうける！」
「由紀！ムービー撮れてる??」
「うん、しっかり撮れてる！」
綾香は文が鼻を折られていく姿をしっかりと仲間の由紀に携帯のムービーに撮らせていた。綾香は文を徹底的にリンチして弱っていく姿をムービーにおさめ、それを流出することで文の失墜を目論んでいたのである。そして綾香の目論み通り、文は鼻を折られ徹底的に無様な姿をさらしていった。

「さて、そろそろかな？目崎の股を広げてスカートをめくって。」
「・・え・・・・・・」
「りょうかい！」
綾香の支持で仲間の不良２人が文の股を広げてスカートをめくった。
すると文の白いパンツがみんなの前に露わになった。
「はい、これから鳴浜高校不良女子ボスの目崎文がおしっこをおもらししまーす。」
「！！」
「きゃはははは！！」
そう、綾香は前の諸角のとの戦いで鼻を集中的に頭突きされた文がその恐怖のあまり失禁したことを覚えていたのだ。現に文は恐怖心と屈辱のあまり、膀胱はゆるみおしっこをいつもらしてもおかしくない状態に陥っていた。
「さあ、早くおしっこもらして下さい、よ！」
ブオッ
バキイィッ
「あぁぁぁ・・・・」
文は綾香に折れたばかりの鼻にパンチを打ち込まれ、さらに鼻は折れてしまった。そして、これが文の失禁へのスイッチとなった。文の頭の中は真っ白になっていき、そして・・・
（・・・も・・・ぅ・・・・・だ・・・め・・・・・・・）
ジワジワ
「ん？」
ジワジワジワ
「・・ああああああぁぁぁぁぁぁ・・・・・・」
文の肛門から少しずつおしっこがもれていき、文のパンツに円上のしみを作り出していく。少しずつ少しずつそのしみは拡大していき、やがては文の足を伝ってゆっくりと下へ流れて行った。
ツーーッ
「うわあ！してるしてるおもらししてる！」

（・・おし・・っ・・・・こ・・・・と・・・・ま・・・・ら・・・・な・・・い・・・・・・
・・・・あぁぁ・・・・・・・・・・）
ショワアアァァッ
とうとう文の膀胱は抑えが効かなくなり、文は本能の赴くまま尿を放出しっていた。異臭を放ち、湯気を沸き立たせながら文のおしっこはどんどんいすの下に水たまりを作っていった。
そうして、文のおもらしが終わったのは1分後だった。おもらしの様子も最初から最後までしっかりと由紀の携帯のムービーに収められてしまった。
「ははは傑作！！すっげえおもらししした！諸角の時もここまでじゃなかったのに！」
「・・・・・・・」
文はすっかりと放心していた。しかし、地獄はまだ終わらなかった。
「何おもらししてんだよ！」
ブオッ
バキィッ
「あ・・・ぐ・・・・・・」
「高校生にもなって！」
バキイッ
「ぁぁああぶぅぅぅ・・・・・・」
さらに不良女子たちは文の鼻を折り続けた。もはや文が助かるには実権をゆずることを認めるしかなかった。
「ま・・・って・・・ぇ・・・・・・じ・・っけ・・ん・・・は・・ゆ・・・ず・・・る・・・・」
「お！」
「あ・・や・・は・・・・・ぼ・・・す・・・・や・・め・・・・る・・・・・」
「やめます、だろ！」
ブオッ

バキィィッ
「はあぁぁぁ・・・・・・・・」
「早く言えよ！」
「・・・や・・め・・・・・・ま・・・す・・・・・・・」
「はーい！じゃあなぜあなたはボスを降りないといけないのか。その理由を述べて下さい。」
「・・・え・・・・・」
ブオッ
バキィィッ
「あぶぅぅぅ・・・・・・・」
「ほら！もっと鼻折られたいの！」
「・・・おも・・ら・・し・・し・・・・た・・・から・・・・・」
「ちがーう！」
ブオッ
バキイイイイッ
「ぁぅぅぅぅ・・・・・・・・・」
「あなたはこないだ諸角に鼻を折られそうになったらいとも簡単にうちの高校を明け渡した。今だってそう。私たちに鼻を折られていとも簡単にプライドを捨てて情けない姿をさらしてボスの座を明け渡した。鼻を折られただけで。諸角が言ってたように、あなたの鼻は天狗の鼻と一緒。折れてしまえばそれで自信もプライドも何もかも無くなってしまう。文先輩、あなたは天狗そのものなんですよ。」
「あ・・や・・・が・・・て・・ん・・・ぐ・・・・・・・？」
「そうですよ！」
バキイッ
「あ・・あ・・・ぁ・・・・・・ぁぁ・・・・・・・」
「私は天狗でした、天狗の鼻はバキバキにへし折られました、これが鼻の折れた私のみじめな顔です。って言いな。」
「・・・・・・・」
「言え！」

バキイッ
「あぁぁ・・・・・・・」
「さあ！」
「・・・・・は・・・・・ぃ・・・・・・・」
（な・・・・ん・・・・で・・・・あ・・・・や・・・・ぼ・・・・す・・・・・
に・・・・・な・・・・っ・・・・ちゃ・・・・った・・・・ん・・・・だ・・・・・
・・ろ・・・・・）
「・・・あ・・・・・や・・・・は・・・・・て・・・・ん・・・・ぐ・・・・・・
で・・・・した・・・・・・・」
（・・・・な・・・・ん・・・・で・・・・ふ・・・・りょ・・・・う・・・・
・・・に・・・・な・・・・った・・・・ん・・・・だ・・・・ろ・・・・）
「て・・・・ん・・・・ぐ・・・・の・・・・は・・・・な・・・・は・・・・
へ・・・・し・・・・おれ・・・・ま・・・・した・・・・・・」
「ほら、さっさと続き言え！」
「これ・・・が・・・・・・あ・・・・・や・・・の・・・・は・・・・な・・・・
の・・・・・・お・・・・れ・・・・た・・・・み・・・・じ・・・・め・・・・
な・・・・か・・・・お・・・・で・・・・・・す・・・・・」
「ははは！！おつかれさん！！」
文の鼻は高かった。自慢の高い鼻だった。高い分折れやすく、折れた後のダメージも普通の高さの鼻よりも大きかった。文はかつてこれほど大きなダメージを受けたことがなかった。自慢の高い鼻はひびを入れられ、折られ、バキバキにされた。その激痛は果てしないものだった。
ブオオオオオッ
グシャァァァァァッ
「はあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・
・・・」
綾香は文の鼻にストレートをスクリューかけて打ち込んだ。文の鼻

にえぐれるように綾香のパンチが入っていき、ついに文の鼻は砕けた。
「・・・な・・・ん・・・・で・・・・・・」
「もう用済みですよ。どうですか？お鼻がぺしゃんこにされた気分は？」
「ぺ・・しゃ・・・ん・・・こ・・・・・？」
パッ
「おおっ！」
「あんなに鼻高かったのに！」
「すっげえつぶれてる！」
「え・・・・？・・・・え・・・・・？」

ブニーン

文の鼻は元々の高さの見る影もなくぺしゃんこになってしまった。鼻先は丸みを帯びてつぶれ横に広がっている。元々とても鼻が高かった分、余計に横に広がっており醜い形に拍車がかっている。折れまがっていた鼻筋でさえ陥没してしまい、すっかりとあぐらをかいてしまっている。文の鼻は鞍鼻変形してしまったのだ。

（あやの・・・たかい・・・・は・・な・・・・・）
≪文さんって本当に鼻高いですよね。≫
≪高い鼻って折れやすいからけんかでも不利じゃないですか。文さんの高い鼻は強さの象徴ですよ。≫
（じまんの・・・たかい・・・は・・・・・な・・・・・）
≪天下の目崎文も自慢のこの高いお鼻を集中攻撃されたらダウンかよ。もう折れるなこの鼻も。≫
≪どうだ！見せかけも空っぽの中身も天狗の鼻が完膚無きまでにへし折られた気分は？≫
≪とうとう折れちゃいましたね。ご自慢の高い高いお鼻。≫

≪あなたの鼻は天狗の鼻と一緒。折れてしまえばそれで自信もプライドも何もかも無くなってしまう。文先輩、あなたは天狗そのものなんですよ。≫

（なぐられて・・・・・

バスッ

おられて・・・

バキッ

ばきばきに・・・さ・・れて・・・・・

バキバキッ

ぺしゃんこ・・・・に・・さ・・・れ・・・・て・・・・

グシャァァァッ

み・・・じ・・・・め・・・・・・・・）

「ぁぁぁあああああああああああうううううううぅぅぅぅ・・・・・」

「あん!?なんだ!?」

そして、文は聞くものの力を奪うぐらい情けない声で一文字一文字をしっかり発しながら、最後のうめき声を上げた。名誉も尊厳も何もかも失った、最もみじめで情けなく無様な姿を体現しながら、文はうめき声を上げた。

「・・・・ぁ・・・・・・・・・・・・や・・・・・・・・・・
の・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・は・・・・・・・・・・・・・・な・・・・・・・・・
・が・・・・・・・・・・
ぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガクッ

そして文は気を失った。文の意識は深く深く遠のいていった。

そして数日後、文の不良グループの連中が集められて上映会が行われた。

もちろん上映された内容は、例の文の公開処刑の映像だった。

文が綾香たちによって公開処刑されたという事実は噂となり、グループの間で広まっていた。だが、すでに不良女子たちの間では綾香を新不良女子ボスとして受け入れる体制が整っていた。霜月高校での一件を目撃して、大半のグループの女子は文に幻滅していたため、この体制を受け入れることにそれほど抵抗がなかったのだ。

後は、不良の男子を説得するだけだった。そのために一同を集めて上映会を行った。男子は始め、文の公開処刑を納得していなかった。しかし、上映された映像を見てみんな愕然とした。文のあまりにも無様で情けない姿。それは想像以上のものだった。男子の中では、次々と綾香を奨励する声が上がって行った。そして何より、それは文の彼氏のヒロキも例外ではなかった。文の最悪な姿を見て、今までの気持が一気に冷めてしまったのである。

「どうです？ヒロキ先輩？先輩の彼女のこの姿。」

「・・・・・こいつはもうオレの女じゃない。」

そして、綾香は不良女子の新たなるボスとなった。文という最悪の不良女子ボスをみんなは罵倒し、新ボス綾香の元に結集したのである。そう、来るべき諸角率いる霜月高校との再戦に備えて・・・。

2ヶ月後

クスクス

今日も後ろから笑い声が聞こえた。それは彼女の以前の姿からは想

像もつかなかった。パーマをかけた金髪はパーマもとれてすっかり黒髪となり、スカートも長くなり、すっかりと地味になっていた。そう、まるで目をつけられることを恐れるかのように彼女はおとなしくなった。もはやほとんど誰とも喋ることをしなくなった。

「おい！」

「！！」

彼女は急に声をかけられた。それも不良からだった。彼女は振り向かなかった。もちろん不老はそれを許さなかった。

「無視すんなよ！」

ガバッ

「きゃあ！」

不良の目に映ったのは、ぺしゃんこな鼻をした女子高生の顔だった。それはまぎれもなく文の姿だった。不良はにやっと笑った。

「冷たいな～目崎。元仲間だろ！？」

「・・・・・やめ・・て・・・・」

バスウッ

次の瞬間、不良の拳は文の鼻に吸い込まれていた。ぺしゃんこになった文の鼻はもはや折れることはほとんどない。しかし、

「・・・ぁぁあああぁ・・・」

シャーッ

「はははは！！またもらした！おもらし女、目崎文！」

文はあの一件以来、鼻にパンチを入れられたり、怖い目にあうと、すぐおもらしをするようになってしまった。それからは不良にからめては鼻を殴られおもらししてはいじめられる。退院以来文はずっとこんな調子だった。

そして卒業するまでこれからもいじめは続く。もはや二度と天狗などといわれることのない鼻と共に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4294j/

天狗　弐

2010年12月31日00時04分発行